

寄稿

先月、念願叶って、長崎の永井隆記念館を訪れた。故永井隆博士のお孫さんである館長の永井徳三郎様にお会いし、1冊のファイルを手渡すことができた。永井博士が旧安曇村の版画家・加藤大道宛てに送った十数通に及ぶ書簡の写しと、博士の死後も交流が続いた、今は亡き2人の遺児（誠一、茅乃）幼少年期の手紙。そして、永井・大道共作『版画集原野の花』の博士直筆原画の写真等々である。徳三郎さんと語り合ううちに、今まで負っていた肩の荷がやっと下りた気がした。案内された如己堂。60年の時空を、超えて、そこに伏す永井博士に出会えたように思えた。

その後、平和案内人さんと待ち合わせをし、誠一君、茅乃さんが通った山里小学校へ向かった。長崎市では平和のための見学者ひとりだけでも案内人をつけ添わせてくれる。昭和20（1945）年8月9日、山里の児童1500人のうち1200人が原子爆弾の犠

永井隆記念館と山里小学校

古畑 博子

牲となった。校内に原爆資料室がある。被爆当時の写真、遺品が数十点。解説文は子供たちの手書きである。昭和24年、永井博士は生存した子供たちの手記を『原子雲の下に生きて』の本に編集した。その印税で建てられた慰霊碑「あの子らの碑」が小高い丘に立っ

ている。炎の中、天に祈る少女の小さなレリフ。碑銘もない。石に刻むより子供たちが語り継いでいくようにとの博士の願いであった。その遺志は連綿と引き継がれ、山里小学校の学校目標は「平和を大切にする心」である。修学旅行の子供たちや見学者が自由に出入りする賑やかな校内。学校が平和学習に解放されていた。裏には防空壕が残され、誰が手向けたか新しい千羽鶴が幾重にも下げられてあった。記念に

かやのさんの版画を山里小学校の子供たちに見てほしかったから。昭和25年、大道の語ったことばが新聞に残っている。「ぜひ、博士の病床を訪れたい」「先生のためなら何でもしてみたい。版画を通して、先生の人生観を普及したい」と。遠い長崎である。願いは叶わず、「原野の花」16点と友情だけが残った。この度の長崎訪問で大道さんの念の一端を果たせたのかと自問している。こちらからは複製の絵葉書を、記念館からはパンフレットを。二つの地で、来館する方々に手渡しながら、ささやかでも平和の懸け橋になればと思っ。

（ふるはた・ひろこ、ギャラリーやましろ「加藤大道美術館」主宰 松本市波田）